

環境先進国

ドイツから学ぶ

2

吉田 浩巳



ドイツの国土は、日本とほぼ同じ面積で、人口は約8200万人です。この国では1900年前後に多くの自然破壊が進行。このころから環境に関する市民活動が徐々に活発になってきました。

1950年には、個々のNPOの力を結集しようと、ネットワーク団体としてドイツ自然保護連盟(DNR)が設立されました。

が中心的な役割を果たしたと言われています。

70年代はドイツの環境活動にとって大きな転換の時期となりました。1976年に連邦自然保護法が施行。背景には、活発な工業生産活動による公害が顕在化し、自然保護の重要性を国民が認識するようになったことが挙げられます。そして、環境保護の視点で法律が定められ、石炭採掘に

抗するために、環境活動が大きくなることになりました。

また、旧ソビエト連邦のチェルノブイリ原発事故は、市民に環境問題を再認識させる機会となり、環境NGOの活発な活動につながっていきました。ドイツ環境保護連盟(BUND)やグリーンピースの設立、緑の党の結成も、このころのことです。

80年代に入ると、環境保護団体を母体とする緑の党が連邦議会で議席を獲得。政治への影響力を持つよう

環境活動の歴史

NGOが政治に影響力

これには1899年に設立された「ドイツ野鳥の会」

よる大気汚染、水銀による水質汚染といった公害に対

になりました。さらに90年代には、経済活動と環境との共存が大きな

テーマに。1998年、ドイツ社会民主党(SPD)と緑の党が連立政権を樹立し、環境政策にも環境NGOの声が反映されるようになりました。こうした動きの末に、環境NGOの意見を聞かずに行政や企業が物事を進めることができない状況が生まれ、現在まで続いているのです。

ドイツでは移動手段として自転車が普及していて、自転車のまま電車に乗る人も多い



(社団法人まちづくり国際交流センター理事 長) 二つ二つ